

スリランカの保育者として

馬場 繁子

スリランカ

スリランカはインド洋に浮かぶ「真珠」とも「牛のよだれ」とも呼ばれますが、九州をひとまわり大きくした位の南アジアに属する島国です。セイロン紅茶や宝石の国という御存じの方も多いかと思います。亜熱帯のこの島では果物も豊富にとれ、王様の時代から食べ物には困らず、手を伸ばせばなんでもあるので、みんな怠け者になってしまふんだよ、という昔話があ

るほど豊かな国です。

私はこの国の幼児教育に関わってから十八年になります。「どうしてスリランカなの？」というと、ネパールの幼稚園での経験を生かしたくて、青年海外協力隊に参加したのですが、当時ネパールからの要請はなく、たまたまスリランカになったというだけのことです。派遣先は中流以上の家庭の子どもたちがやってくる立派な幼稚園でした。私の想像とはまるで違う世界でした。しかし、都市の貧困者家庭やほとんど情報

の入らない地方の現状を知るにつれ、この人たちとともに働きたいとおもい、帰国後にNGO (Non Governmental Organization) スランガニ基金を作りました。任地以外の状況を知りたくて低所得者層の住む地区を歩いていいたとき、子どもたちに家屋の一部を開放し、読み書きを教えていた保育者に会いました。

この人がスランガニ・ルピカ・ラナシンハさんです。スランガニ基金はこの小さな幼稚園の支援からスタートしました。

この幼稚園はコロンボ郊外のペーリヤゴダ地区にあります。低所得者層が住むこのあたりは栄養失調の子どもたちも多く、おやつにミルクを出していました。建物は雨漏りがひどく雨の日はお休みでした。その場しのぎの応急修理をくり返しても限界があり、一九九二年に建て直しました。この頃から、ゆつくりと地区全体の環境も改善され、定職に付く父母も多くなり生活が安定してきたためか、栄養障害の子どもは少なく

なりました。もちろん、麻薬やアルコール中毒という問題はいまだに続いています。熱心な保育者と協力的な父母がこの幼稚園を支えて、今では地域一の幼稚園と評判になっています。

幼稚園事情

都市コロンボは発展しています。もちろん物価も高くなって生活が大変です。そんな中でもお金に糸目をつけずに、幼稚園に通わせる親が増えています。月謝の高いところが良い教育をしていると言う親もいます。スリランカの人たちは子どもを可愛がり教育にも熱心です。将来のためによりよい学校にいれようとする風潮は、日本とよく似ています。こんな親の心をうまく挿んで、幼稚園も商売になっています。英語教育を売りものに、園庭のない場所でも繁盛しているのは驚きです。

政府の規制も少なく、誰もが始められる幼児教育分

野へは、内外のNGOや個人による支援活動も活発です。日本のように施設の規模が大きなものから、近くの子ども数人を集めて家の一部で教えているもの、地域の集会所を利用したもの、またはお寺の一角を開放しているものなどさまざまです。しかしこれらの幼稚園は横のつながりが希薄です。それでも近年政府が幼児教育に力を入れ、各地で保育者のために研修会を開催しているのは嬉しいことです。でも僻地には情報が入らなかつたり、会場が遠く交通費や時間を作り出せずに参加できないこともあります。また、一過性のイベントのような研修会ではなく、もつと地域に根づいた継続する形の交流ができないものかと考えました。

研修会

せっかくの研修会ですから、保育者が一人でも多く参加できるようにと、僻地に出かけていって研修会を開き、孤軍奮闘している保育者たちのネットワークを

作りました。「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があるスリランカですから説明は簡単。地域でまると、個人の持っている保育のアイデアを交換し、子どもたちのためによりよい学びの環境づくりをすることを目的に、研修会を始めました。

一九九六年、南部農村地区エンピリピティヤの保育者対象に第一回の研修会をしました。保育者は収入が少ないこともあって社会的地位は低く、職業にプライドを持つことは稀でした。そんな保育者たちに胸をはって「私は幼稚園の先生よ」と言ってみてほしい、「誇れる大切な仕事をしているんだ」という気持ちを持つてほしくて、保育者に焦点を当てた研修会をしました。みんなが講師になって教えあうのです。恥ずかしがっていた保育者も発表が始まり、しばらくすると少しずつ胸をはってくるのがわかります。昨年六年ぶりに同じ会場で研修会を開きましたが、初めて研修会に参加したときの、あのおどおどした様子はまるでな

く、地域に根付いた保育者の自信に満ちた顔が並んでいました。とてもすてきな光景でした。

小規模貸し付け

幼稚園は資金難です。研修会で保育技術を磨くことはできませんが、保育者の給料もままならない状況では、備品や教材に使えるお金はありません。父母や近くのお店やさんにお願ひして集めた空き箱や王冠で教材作りなどしていますが、備品を揃える資金は捻出できません。そこで、少額の資金を貸し出すことにしました。収入の少ない幼稚園に対し、保育環境の向上を目的に、五〇〇〇ルビー（約六〇〇〇円）を貸し付けました。返済方法を確認し、審査に通った二十三園は二年間で予定どおり返済しました。机や椅子を揃えた園、ロッカーを買った園、そしてブランコとシーソーをつけた園は予算オーバーでしたが、嬉しい事に地域の有力者が足りない分を負担してくれたそうです。



▲ ジャックフルーツの葉でかんむり遊び
コロンボ郊外のパーリヤゴダ地区のスランガニ幼稚園で

地区連合組織

貸し付け返済は地区全体に責任を持たせたため、保育者も会う機会が増えて情報も行き来するようになりました。そしてもつと連帯を強くできたら保育者も元気になって、元気な保育ができるはずと思いいグループ作りを始めました。単独で役所に掛け合っても相手にされませんが、まとまると無視することはできないからです。

二〇〇三年、五地区で幼稚園連合が組織されています。二五〇程の園が研修や訪問などを通して子どもたちの学びの環境づくりに取り組んでいます。幼稚園連合はスモール・グループから成り立っています。このグループは、気心の知れた連絡の取りやすい近隣の幼稚園が五から九園集まったものです。グループで合同運動会をしたり、園の訪問を通して活発に活動しています。時には保育者の底力を見せつけられることもあ

ります。例えばある園では、選挙前に票集めのため立候補者から救急箱の寄付がありました。こういったことはスリランカではよくあるのですが、もらった保育者はグループの皆に連絡して、皆でもう一度もらいに行きました。いまでは七つの幼稚園全部に救急箱が備わっています。また、月に一度の集まりで少額のお金を集めているのですが、まとまったところで皆で銀行にいきました。「この銀行を使うから子どもたちのためになができますか？」と尋ねたところ、銀行の宣伝をさせてもらえば、年度末にプレゼントを用意するという約束をしてくれたそうです。なかなか頼もしい保育者たちです。

絵本箱

保育者の連帯づくりも安定してきたので、昨年子どもたちの手に絵本を届ける「絵本箱アリペンチャ（ちいさなゾウさん）」事業を始めました。移動式の絵本



▲研修会で踊る先生たち 南部農村地区のエンビリビィティアで

箱には二十五冊のスリランカの絵本が入っていて、貸し出したグループ内を一ヶ月ずつ巡回します。週に一度は子どもが好きな本を選んで家庭へと持ち帰ることができます。絵本と共に感想ノートを渡しますが、様々な言葉が綴られています。「絵を見て自分で話をつくる」「主人公になって遊ぶ」「結末を変えてしまおう」など想像力を膨らませる子どもたちのこと。「お父さんのおなかの上で本をよんでもらった」「近所のこどもがきて一緒に読んだ」「おばあちゃんに読んでもらった」など家族や地区のつながりを深めることにも一役買っていること。「本の貸し出しの日は自分で支度をする」「貸し出しバックを市場にもっていく」として、子どもに叱られた」「牛のお父さんには角があるけど、ぼくのお父さんにはどうしてないの?」などなど、微笑ましい感想もありました。

途上国は一般に幼児にあった絵本や本が少なく、あっても比較的高価です。幼児に届ける絵本は、その

国の文化や環境から生まれたもの、そして楽しいものであってほしい。絵本箱に入れる本は、子どもたちに好評な「絵の多い」ものが理想です。絵本を探しにスタッフは本屋さんに足しげく通い、作家の家を訪ねていますが、残念ながらまだまだ文字ばかりの目立つ、ところどころに挿し絵が描かれているものが半数以上です。

スリランカの絵本出版は近年その数をぐんと増やしています。しかし、文字が多くなければ本ではない、教訓が含まれていなければいけないなど、絵本への認識はまだ浅いのですが、熱心な作家や出版社とともに良質の絵本を作り出す方法を考えるのも今後の課題です。

共に生きる

途上国というと「弱い、貧しい」というイメージがまだあり、国力や経済力の差が人と人の関係を位置づ

けることがあります。そして、支援活動というと「与える」と結びつきがちです。人々の持っている力やその国で生きていた経験を考えず、私たち外の者がよかれと思う活動をしてしまうことがあります。結果、一方的に与えるばかり受けるばかりの関係になってしまいます。誰でももらうことは嬉しいので喜んで受けますが、同時に保育者たちの持っている力を引き出す環境を作ってあげることが大切なことと思えます。そして自国の文化を大切にしたい、子どもたちの環境から生まれた保育をみなで作っていくのです。これは、子どもと私たち大人との関係そのものです。間違えたっていい、ゆっくりでいい、一人一人の力を信じて待つ。投げた石の波紋がゆっくりと広がっていくのが見えています。

(元青年海外協力隊幼稚園教諭隊員
NGOスランガニ基金代表)